

メッセージアウトライン 創世記40:1～23「監獄のヨセフ」

ヨセフは奴隷として仕えていた侍従長ポティファルの妻の誘惑を退けたために、彼女の欺きのことばを信じたポティファルの怒りを買って、王の囚人が監禁されている監獄に入れられてしまった。しかし、主はそこにおいてもヨセフとともにいてくださり、彼に恵みを施し、監獄の長の心になうようにされたので、彼はそこでなされるすべてのことを管理するようになった。主が彼とともにおられたので、彼が何をしても成功した。

[1-3]「これらのことの後、エジプト王の献酌官と料理官が、その主君、エジプト王に対して過ちを犯した。ファラオは、この献酌官長と料理官長の二人の廷臣に対して怒り、彼らを侍従長の家に拘留した。それは、ヨセフが監禁されているのと同じ監獄であった」

ここにはどのような罪を彼らが犯したかは書かれていないが、かなり重大な罪であったようである。2節からもわかるように彼らは高級官僚であり、特に献酌官長は王の相談役をも務めていた。彼らはエジプト王の怒りを買って、監獄に入れられたが、そこはヨセフが監禁されているのと同じ監獄で、侍従長ポティファルの家であった。

[4]「侍従長がヨセフを彼らの付き人にしたので、ヨセフは彼らの世話をした。彼らは、しばらく拘留されていた」

献酌官長と料理官長はともに高い地位の人物であったので、この時は侍従長ポティファルが直接動いたのであろう。監獄の長の上に最高責任者として侍従長がいたのである。ヨセフは監獄の中にあってもポティファルの奴隷であることに変わりはないので、監獄の中でも評判の良かったヨセフを彼らの付き人にしたのであろう。

[5]「さて、監獄に監禁されていた、エジプト王の献酌官と料理官は、二人とも同じ夜にそれぞれ夢を見た。その夢にはそれぞれ意味があった」

当時、エジプトでは夢に予言的な価値を認め、夢の解釈の専門家もいたことがわかっている。

それで、二人とも自分の見た夢には何か意味があると思った。

[6]「朝、ヨセフが彼らのところに来て、見ると、彼らは顔色がすぐれなかった」彼らは同じ部屋に入れられていたと思われるので、ヨセフは彼らの様子を同時に知ることができたのであろう。

[7]「それで彼は、自分の主人の家に一緒に拘留されている、このファラオの廷臣たちに『なぜ、今日、お二人の顔色がさえないのですか』と尋ねた」

別にヨセフはこんな質問をしなくても、事務的に彼らの世話をし、さっさと

引き下がってくることもできただろう。それゆえ。このようなことばをかけて心配するところに彼の誠実さがよく表れている。

[8] 二人は答えた「私たちは夢を見たが、それを解き明かす人がいない」

つまり、獄中で捕らわれの身であるので、夢を解く専門家に会うことができないというのであろう。しかし、その専門家が正しい解き明かしをしてくれるかどうかは別問題。そのような人々は呪法師、占い師の類であろう。ヨセフは彼らに言った。「解き明かしは神のなさることではありませんか。さあ、私に話してください」。ヨセフはかつて自分の見た夢のことを思い出したのかもしれない。彼にとって夢を解くことは人のすることではなく、神のなさることであると理解していた。未来は神の手の中にあるので、有限で不確かな人間が、自分の知恵や知識でそれを知ることはできないのである。彼は夢を解くことについては神に聞かなければならないとわかっていたので、「私に話してください」と言ったのである。そうすればその夢の内容を神に尋ね、教えていただくことのできる確信があったのであろう。

[9-11] 「献酌官長はヨセフに自分の夢を話した」

彼が先に話したのは、その夢の内容に特に不安を感じる要素がなかったからであろう。「夢の中で、私の前に一本のぶどうの木があった。そのぶどうの木には三本のつるがあった。それは、芽を出すと、すぐ花が咲き、房が熟してぶどうの実になった。私の手にはファラオの杯があったので、私はそのぶどうを摘んで、ファラオの杯の中に搾って入れ、その杯をファラオの手に献げた」これは彼の宮廷での仕事の内容と関連があるものであった。

[12-13] ヨセフは献酌官長の夢の内容を聞いて、ただちにその解き明かしを始めた。もちろんそれは彼が勝手に思いついたことではなく、神によって示されたものであろう。三本のつるとは三日のこと。三日のうちにファラオは献酌官長を呼び出し、彼をもとの地位に戻す。そして以前のように、自分の仕事をし、ファラオの杯をその手に献げるようになるというものであった。

[14-15] 続いてヨセフは自分のことを話す。献酌官長が監獄から解放され、元の地位に戻され、「あなたが幸せになったときには、どうか私を思い出してください。私のことをファラオに話して、この家から私が出られるように、私に恵みを施してください」(14) と願う。さらに自分は「ヘブル人の国から、さらわれて来たのです。ここでも私は、投獄されるようなことは何もしていません」(15)と付け加える。このようにヨセフは自分の解放の望みを献酌官長に託すのであった。そしてまた彼は兄たちが自分を売ったことや、主人ポティファルの妻の罪を訴えてはいない。このようにとほころにも彼の品性の高さ、立派さというものを見ることができるといえる。苦しみや忍耐の中で、神は彼をこのように成長させられたのである。私たちがならばどうだろうか。この時とばかり、口を極めて、相手の罪をあけて、

あること、ないことを細大漏らさず語り続け、相手を極悪人に仕立て上げるということはないだろうか。

うらみ、憎しみ、怒りが燃料となり、激しく燃え上がってしまう。私たちもヨセフのように高潔な人格を持ちたい。

[16-19]料理官長は献酌官長の夢の解き明かしが良かったので、今度は自分の見た夢をヨセフに語る。「私の夢の中では、頭の上に枝編みのかごが三つあった。一番上のかごには、ファラオのために、ある料理官が作ったあらゆる食べ物が入っていたが、鳥が私の頭の上のかごの中から、それを食べてしまった」(16~17)

今度もヨセフは神に示されて解き明かしを始める。しかし、その口調は内容から考えて、少し沈みがちであったのではないか。「三つのかごとは三日のことです。三日のうちに、ファラオはあなたを呼び出し、あなたを木につるし、鳥があなたの肉をついばむでしょう」(18~19)

これを聞いた料理官長はどんな顔をしたであろう。「三日」までは献酌官長と同じであったが、その後には全く正反対の悲劇的な結末が待っていたのである。エジプトでは人々は死後、ミイラとして葬られることを願っていたので、このような死に方は最悪の極刑であった。料理官長は倒れこんでしまって、絶望のうちに三日間を過ごしたのではないだろうか。

現代においても占いが盛んにおこなわれている。その中には、夢を解き明かしてもらって自分の将来や歩むべき道を知るといった類のものがあるが、聖書に出てくる夢の解き明かしは、このヨセフの場合とダニエル書に出てくるダニエルの場合のみである。ヨセフの場合、場所はエジプトでダニエルの場合はバビロンで、ともに夢に意味を見出し、それを解くことの盛んな地であった。主なる神は異邦人のこのような状況をあえて用いられて、これから起こってくるご自身のみこころを示すことを良しとされたのである。ヨセフの場合、主なる神はこのような出来事を用いて彼のエジプトでの歩みを着実に導いてゆかれるのである。しかし、聖書が占いについて教えている大原則は決してそれをしてはならないということである。私たちは自分の見た夢の意味を知ろうとして、それを誰かに解き明かしてもらおうようなことがあってはならない。→申命記18：9~15

特に15節で言われている、「私たちが聞き従わなければならない一人の預言者」とはキリストのことである。→使徒3：22~26 私たちは自分の生き方、歩みを占い師ではなく、私たちの主イエス・キリストに、そして聖書に聞かなければならない。→Ⅱテモテ3：15~17

[20] 二人に語られた「三日のうち」の意味がここでわかる。三日目はファラオの誕生日であり、彼は自分のすべての家臣たちのために祝宴を催し、献酌官長と料理官長を家臣たちの中に呼び戻したのである。

[21] そして、その場でファラオは献酌官長をもとの献酌の役に戻し、役に戻され

た彼はファラオの手に以前のように杯を献げたのであった。

[22] そして、もう一人の料理官長のほうも、その解き明かしのとおり、ファラオによって木につるされたのである。献酌官長にとってはこの祝宴は恩赦の機会となったが、料理官長にとっては最悪の日、人生最後の日となってしまった。

この後は献酌官長がヨセフのことをファラオに話して、ヨセフが監獄から解放されれば、すべてがうまくいくことになる。ひょっとするとカナンの地にいる父ヤコブのもとに戻れるかもしれない。

[23] 「ところが、献酌官長はヨセフのことを思い出さないで、忘れてしまった」

何ということであろうか。献酌官長はヨセフのことを忘れてしまったのである。しかし、これはすぐに完全に忘れてしまったということではなく、何度となくヨセフのことを思い起こしながら、ひょっとしてこんなことを言うとファラオの機嫌を損ねてしまうかもしれないと思って、その機会を待っているうちに忘れてしまったということの方が真実に近いのではないだろうか。

ヨセフの失望落胆は大きかったことだろう。せっかく監獄から解放される期待をもって待っていたのに、全く音沙汰はなく、むなしく時間は過ぎ去り、ついに自分は忘れられたのだという結論に行きついてしまった。ヨセフは献酌官長を恨み、神に対して不平を言っただろうか。それはわからない。しかし、ヨセフの考えとは別に、神の大きな計画はすでに動いていたのである。神はヨセフの解放の最善のタイミングを知っておられる。その時まで神はヨセフをなお監獄にとどめられ、忍耐の時を持たせられるのである。

人の思いと神の思いは違い、人の最善の時と神の最善の時は違う。私たちは神のみこころを知ることをせず、自分の思い、自分の計画で物事を押し進め、突っ走ろうとするが、それは神の計画とは違い、神の時ではないかもしれない。そして私たちは失望落胆してしまう。しかし、神の定めの時はずっとやってくる。それゆえ、私たちは不信仰になったり、絶望してしまったりするのではなく、なおも与えられている時を忍耐をもって、信仰をもって、神の時を待ち望み、そしてその時が来れば、神が最善をなしてくださり、私たちを苦しみや、悲しみ、涙から引き上げてくださることを信じる必要がある。そのようにして、私たちは与えられている日々を労苦しつつ、自分のなすべきことに励み、信仰においても、靈性においても、品性においても、愛においても成長していく者になりたい。→ヘブル10：35～36